



あったか通信

令和6年12月

暗くなってきたある日。未満児クラスではお友だちをお迎えに来られた保護者が帰ると、涙ぐむA児。

A児

日があるころは元気に遊んでいたのに、日が暮れかけ暗くなりだしてから涙ぐみはじめました。

保育者

A児が、保護者が帰る度、涙を流し始めたのに気づき膝に抱き上げると、少しは落ち着いたように他の子どもたちの遊びを見始めました。しかし、別の保護者がくると涙ぐむA児。

B児

何もいわずに、膝の上のA児の鼻が出ているのに気づいてティッシュペーパーで鼻をふいてくれました。

保育者

「Bちゃんありがとう。気づかなくて。ふいてあげてくれたんやね」

B児

「うん」というようにうなずき、あそびに戻っていきました。

11月に入り少しずつ日が速く暮れるようになります。小さな子どもたちは時間がわかりませんので、暗くなると夜になっているのに迎えがないという思いで不安になり、涙が出てきてしまったようです。保育者も何度か鼻をふいていたのですが、B児が誰にも言われていないのに、自分で気づき自分より小さいお友だちのために動いてくれました。誰に教えられるのでもなく、今日までの生活の中で、自分がしてもらったり、お友だちがしてもらっている様子を見たり、体験してきたからでしょうか。見て学んでいく子どもたちの育ちに改めて驚くとともに、言葉もまだまだ幼い子たちの、気づきあい、気働き、小さなお世話をする様子を見て心がぽっとあたたかくなる出来事でした。



